

ぼんぼん時計

JSPS BONN OFFICE

日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告
(2003年10月~12月)

2004年3月22日

1. はじめに

「ぼんぼん時計」第2号(2003年10月~12月)を配信します。第2号にして、配信日が早くも大幅に遅れてしまったことを、まずはお詫びいたします。

2003年11月には、ヒト胚性幹細胞研究をめぐる大きな動きが、EUレベルとドイツ連邦レベルとで確認されましたが、この経緯を整理するのに時間が予想以上にかかっており、次回レポートにまわしたいと存じます。

以下、簡単ながら、今回の報告です。

2. ドイツ連邦レベルでの学術動向

◎ドイツ初の海外設置大学—カイロ・ドイツ大学—

ドイツ初の海外設置大学となるカイロ・ドイツ大学(German University in Cairo)が、10月5日、Gerhard Schröder 連邦首相およびHunsi Mubarak エジプト大統領臨席により、開校した。10月12日が開講日である。

カイロ・ドイツ大学は、ドイツの大学基準と講義内容に則った、ドイツ初の海外設置大学である。一人のエジプト人教授のイニシアティブと、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州のウルム大学およびシュツットガルト大学からの援助により、開校が実現した。

ドイツで養成された大学教員が、まずは約700~1,000名の選抜された学生に講義を行う。学生は大学内の「German Center」でドイツ文化に親しむことができる。講義は英語で行われるが、全学生に対して、専攻課程に加えてドイツ語の履修が義務づけられる。

このプロジェクトは、ドイツ学術交流会(DAAD)による「ドイツの大学教育課程エクスポート・プログラム」の助成を受けている。それに加えて、大

学創始者 Ashraf Mansour 氏が、エジプトで私費を大学に投資している。彼は5年後に5,000人の学生数達成を目標にしており、同時に400人のドイツ人大学教員がこの1,700万人都市カイロで快適に暮らしてくれることを願っている。

開校にあたっては、薬学工学部、バイオテクノロジー部、メディア工学部、情報工学部、マネジメント部、エンジニアリング科学部、材料科学部が設置されているが、後にその他の学部も加わる予定だ。学生は理学学士号および理学修士号とドイツのディプロームを両方取得することができる。

厳密には、カイロ・ドイツ大学は、唯一のドイツ国外設置大学ではない。シンガポールやバンコクを含め、ドイツの大学教育課程を輸出しようとしている計29のプロジェクトが存在するからだ。

ドイツ連邦教育研究省(BMBF)は、これまでドイツの大学の国外設置プロジェクト29件に1,000万ユーロを拠出してきた。その中には、リオ・デジャネイロの短期夏季大学コースや、キューバのエネルギー・環境技術に関する短期課程および全課程がある。ブダペストにあるドイツ語大学は大学院を設置しているし、ハノイにはドレスデン大学所有の有限会社の形態でドイツ研究所がある。また2月にはミュンヘン工科大学がシンガポールに4つの継続教育課程をもった国外設置校を開いた。

しかし、カイロ・ドイツ大学は規模としては最大のプロジェクトである。もっともキャンパスの一部は、いまだ建設中であり、しばらくはこの状態が続くらしい。Mansour氏なくして、このカイロ・ドイツ大学はあり得なかった。57万7,000平方メートルの敷地は、大学法人がエジプト国家から特別料金で買いつけたものである。

Mansour氏は半ばドイツ人みたいなものだ。彼は1990年代初めにDAADの奨学金を受けてバーデン・ヴュルテンベルク州で学び、博士号を取得した後、1997年にウルム大学で大学教授資格を取得した。高分子物理が彼の専門で、ドイツ語・ドイツ文化は彼の情熱の対象だった。ウルム大学がシュツットガルト大学と協力関係について話し合いをもった時、このエジプト人が話に加わった。カイロにおける共同研究所のアイデアが、私立のドイツ大学設立計画まで発展したのだ。

大学の「容器」はエジプト側、「中身」はドイツ側の出資による。ウルム大学とシュツットガルト大学は、バーデン・ヴュルテンベルク州、連邦教育省、DAADの助成を受けている。これまでに60万ユーロがカリキュラム考案と人件費、雑費、旅費に使われた。DAADからはさらなる出資も約束されている。

カイロ・ドイツ大学でドイツの大学教育制度の規則に従って講義が行われることは、当初から決まっていた。「分析的思考と独立した作業の習得、つまりフンボルトの原則が大事なのです。」とMansour氏は言う。実際、大学でも暗記型の教育が大部分であるエジプトでは新しい観点である。

このような海外プロジェクトは、ドイツの大学の売り込みとばかり断ずることはできない。世界中で150万人以上の学生が大学教育課程の一部を国外で履修している。彼らには才能と経済力があり、数年後には自国のリーダーになる

チャンスをもっている。彼等が経済投資や政治的な同盟について決定を下すようになるし、故国を文化的に形成していく。

このような将来のエリート達の間で、ドイツは人気留学先としてアメリカ、イギリスに続く3位となっている。国際的な教育市場は今度20年間に4倍に成長するが、その多くはアジア地域からの需要によるものだ。ドイツが現在の地位を維持するためには、更なる努力が必要であろう。約80万人の外国人学生をドイツの高等機関が養成するとなると、ドイツ国内の大学あるいはドイツ国外設置校で、となる。後者は、外国の卒業資格を望むものの、経済的に外国留学が難しい学生のためのものだ。このような新規事業はドイツの大学にとってメリットが大きい。つまり、学生の選抜、授業料徴収、少数のエリート教育等、国内では禁止されていることが全て可能なのだ。

カイロ・ドイツ大学は、卒業資格についてもドイツの伝統より国際性を重視している。ただし、専攻科目の構成はドイツ式である。

学生の選考方法は少々複雑である。まずインターネットによる最初の申し込みの後、志願者は学力テストを受けることになっている。50分で50問、アラブ語によるテストだ。第一次選考の次は、英語力テストだ。講義がドイツ語でなく英語なのは実用的な理由からだ。エジプトの教育制度は歴史的に植民地時代からのイギリス(そしてフランス)の特色が濃い。

エジプトに大学設立するのはドイツが最初ではなく、既にアメリカン・ユニバーシティとフランスの大学海外校が将来有望で金銭的余裕のある学生を集めている。だが、それらの大学は人文系・経済系の学部重点を置いている。

自然科学・技術系の合計5学部がある。薬学やバイオテクノロジー、機械工学、材料科学のような学部がこのような組合せで専攻できるのはエジプトで初めてのことだ。学術スタッフの半分以上、そして教員の50%がドイツ人だ。現状ではむしろ工科大学の特徴を有しているが、今後、人文系の学部が加わることになっている。

理事長はエジプト人だが、大学評議会にはドイツ人が数多く占めており、ウルム大学とシュツットガルト大学の学長およびバーデン・ヴュルテンベルク州教育大臣もそのメンバーである。このようにドイツ人が大学内で強い影響力を持つことが確約されている。

Michael von Gagernはドイツ・カイロ大学プロジェクトがドイツの新しい外交的役割を担うと信じている。61歳でミュンヘン出身のvon Gagernは哲学と財政学で博士号を有し、以前、シンガポールのミュンヘン大学国外課程の設置に尽力した人物だ。彼はこのようなプロジェクトがもつ長期的意義を確信している。今から10年後、エジプト人がドイツを連想する時に、カイロ・ドイツ大学が浮かべば、多くを達成したということになるだろうか。

参考：dpa, Nr. 51-52/2003, 6. Oktober 2003
Die Zeit, 41/2003

◎ドイツ人大学生・教員の欧州内留学増加—エラスムス計画—

ドイツ学術交流会(DAAD)は、2002年6月～2003年9月の間に、約18,500人のドイツ人学生が、欧州学生交流計画(エラスムス計画)の助成を受けたと発表した(12月9日、於ボン)。これは前年比2,000人増であり、過去最高の人数である。平均して学生一人あたり月額118ユーロの支援を受けており、授業料は免除となっている。また、同計画によりドイツ国外へ行く教員も増えており、前年比で平均以上の増加が見られる。

学生に非常に人気のある国はスペインで、前年比600人増の3,892人が留学した。その次がフランス(300人増で3,549人)、イギリス(100人減で3,136人)となっている。最も留学生数が高いのが経済学部(全体の25%で4,549人)で、その他は文学・語学系学部(全体の17%で3,207人)、社会学部(全体の10%で1,788人)となっている。

また、大学課程の一部を中部ヨーロッパおよび東ヨーロッパで履修する学生数も増加しており、昨年より120人多い689人となっている。

教員についても、2001/2002年の大学年度に比べて12%増しの2,115人となっている。ここでも人気が高いのはスペインで263人(+40人)フィンランドが195人(+42人)、チェコが127人(+36人)、ポーランドが185人(+20人)と記録されている。合計743人のドイツ人教員が、エラスムス計画の枠内で中欧及び東欧に渡航した。

参考：dpa, Nr. 51-52/2003, 12. Dezember 2003

3. 荣誉・顕彰

◎チュールヒ賞、御子柴克彦教授に—日本人研究者として初の受賞—

去る9月12日、ドイツのGertrud Reemtsma財団は、東京大学医科学研究所の御子柴克彦教授と、米国Salk生物学研究所のFred H. Gage博士の2名に、チュールヒ賞を授与した。

東京大学で細胞機能に重要なカルシウム・イオンの研究に従事している御子柴教授は、細胞内のカルシウム濃度を調節する分子である、いわゆるIP3受容体を発見し、その構造を決定した。また、ネズミを使った動物実験において、脳神経系の発生と分化に関し、新たな遺伝子群Zicを発見し、発生初期段階において脳の作られる分子メカニズムの解明に貢献した。

カリフォルニア州のソーク生物学研究所に所属するFred Gage氏は、哺乳類の神経細胞が日常的に再生していくことを発見した。この発見により、脳障害の再生医療において新しいストラテジーが生まれることが期待される。

※ チュールヒ賞とは

チュールヒ賞とは、ドイツの Gertrud Reemtsma 財団が、神経科学の基礎研究において卓越した業績をあげた研究者に授与される国際的な賞。1990 年以来毎年 2 名に授与。賞金額は 50,000 ユーロ (約 670 万円)。

ちなみに Gertrud Reemtsma 財団とは、マックスプランク脳科学研究所の Klaus Joachim Zülch 博士を記念して、同氏の妹である Gertrud Reemtsma 氏によって 1989 年に設立された。理事長には、マックスプランク協会会長もしくは同協会の生物医学部門のトップが就任。現理事長は、同協会会長の Peter Gruss 氏。

参考 : *die Welt*, 16/09/2003

4. ボン研究連絡センターの活動

◎来訪&訪問

【10月】

- 10月 6日 (月) ドイツ・ノルトライン・ヴェストファーレン州・研究省・事務次官・Hartmut Krebs 来訪[対応 : 田中、萩尾]。
- 10月 7日 (火) 北海道大学・理学部・教授・馬渡駿介氏、ゼンケンベルク研究所・海洋動物学部門・Dr. Joachim Scholz 来訪[対応 : 萩尾、Ganter、我妻]。
- 10月 8日 (水) 萩尾事務官、我妻研修員、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団 (A v H) 主催の若手研究者との意見交換会に出席。
- 10月 9日 (木) 萩尾事務官、Ganter 職員、我妻研修員、在独大韓民国大使館ボン支所主催、建国記念パーティーに出席。
- 10月 10日 (金) ドイツ航空宇宙飛行センター・Dr. Thomas Hagemann、来訪[対応 : 萩尾]。
- 10月 12日 (日) 日本学術振興会・国際研究協力課長・古川佑子氏、同・企画第一係長・小山佐和氏、同・係員・伊藤真木子氏、来訪[対応 : 萩尾、我妻]。
- 10月 13日 (月) 古川課長ご一行、在独日本大使館・一等書記官・森田正信氏、田中センター長、萩尾事務官、A v Hを訪問し、先端科学シンポ

ジウム立ち上げなどについて協議。対応者は、Dr. Manfred Osten (事務総長)、Dr. Gisela Janetzke (副事務総長)、Dr. Ulrike Albrecht (対外戦略企画課長)、阿部研修員他1名。

ミュンヘン大学生 Andre Hertrich 氏、来訪[対応: Ganter]。

10月14日(火) 古川課長ご一行、在独日本大使館・一等書記官・森田正信氏、田中センター長、萩尾事務官、ドイツ研究協会(DFG)を訪問し、先端拠点研究科学協力事業立ち上げなどについて協議。対応者は、Dr. Michael Meier (国際協力部長)、Dr. Gernot Gad (国際協力部・日本・韓国・東南アジア課長)、Ms. Maria Hesse (同係員)、Dr. Priya Bondre-Beil (卒後過程プログラム、プログラム・ダイレクター)。

古川課長ご一行、在独日本大使館・一等書記官・森田正信氏、田中センター長、萩尾事務官、ドイツ学術交流会(DAAD)を表敬訪問。対応者は、日本・韓国・インドネシア・オーストラリア・ニュージーランド・オセアニア課長 Dr. Ursula Toyka-Fuong 他1名。

10月15日(水) 古川課長ご一行、ミュンヘン総領事館・寺岡敬領事、同・宮田領事、田中センター長、マックスプランク協会(MPG)を訪問し、先端研究拠点事業の立ち上げ等について協議。対応者は、国際交流課長・Dr. Berthold Neizert、同係員 Dr. Barbara Spielmann。

10月16日(木) 萩尾事務官、我妻研修員、ヘルムート・ホルツ協会年次総会出席(於ハンブルク)。

10月17日(金) 萩尾事務官、我妻研修員、日本学術振興会海外特別研究員に対する聴き取り(於ハンブルク)。

10月20日(月) DFG・国際協力部・日本・韓国・東南アジア課長・Dr. Gernot Gad 氏、来訪[対応: 萩尾、Ganter]。

フンボルト財団への謝恩会(於ボン。阿部係員を研修員として受け入れてくれたことに対するお礼)。

10月21日(火) 我妻研修員、東北大学フォーラム(於ゲッティンゲン)に出席(～25日)。

- 10月22日(水) 萩尾事務官、一時帰国(～11月3日)。
- 10月25日(土) 田中センター長、ブラックホール・ワークショップ(於京都)出席等のため、一時帰国(～11月2日)。
- 10月30日(木) 阿部 AvH 研修員、帰国。

【11月】

- 11月5日(水) 宇宙航空研究開発機構・ボン事務所・所長代理・大井田俊彦氏、同アシスタント・松尾＝カンナ・ニーフス氏、来訪[対応：萩尾、我妻]。
- 11月6日(金) 「第9回全ドイツ日本学術振興会事業経験者の会・日独学術シンポジウム」について、同窓会幹部と打合せ。マールブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・講師・Dr. Ingrid Fritsch 氏、来訪[対応：田中、萩尾、Schulze、我妻]。
- 11月9日(土) 田中センター長、宇宙航空研究開発機構・評議会出席等のため、一時帰国(～15日)。
- 11月20日(木) 萩尾事務官、Ganter 職員、大学長会議(HRK)主催、「大学における品質保証」シンポジウム(於ボン)に聴衆として参加。
- 11月21日(金) 田中センター長、萩尾事務官、Ganter 職員、我妻研修員、同窓会主催の「会員による会員の招待」催事に出席。本会事業広報活動(～22日)(於マールブルク大学)。
- 11月27日(木) 田中センター長、デュッセルドルフ大学長離任式に出席。
萩尾事務官、我妻研修員、ストラスブール連絡事務所主催、第2回フォーラム出席(～30日)。
- 11月28日(金) マールブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・講師・Dr. Ingrid Fritsch 氏、ボン大学・講師・Dr. Andreas Marx 氏、来訪[対応：Schulze]。
Schulze 職員、フンボルト財団フェオドア・リューネンプログラム同窓生・新規採用者への情報提供会出席。

【12月】

12月 3日(水) 田中センター長、宇宙航空研究開発機構・評議会出席のため、一時帰国(～7日)。

12月10日(水) 全スタッフ・ミーティング。

田中センター長、萩尾事務官、Ganter 職員、我妻研修員、A v H創立50周年記念行事の最後としてDr. Osten 事務局長離任式に出席。

12月11日(木) 文部科学省・科学技術・学術政策局・国際交流官・平下文康氏、来訪[対応:萩尾]。

12月15日(月) 萩尾事務官、在独日本大使館・広報文化担当官会議に出席し、本会諸事業を説明(於ベルリン)(～16日)。

12月17日(水) 萩尾事務官、Ganter 職員、第9回日独学術シンポジウムの会場下見及び事前協議のためハレ市を訪問(～18日)。

田中センター長、一時帰国(～23日)。

◎OB会支援企画―「会員による会員の招待」―

ドイツの学振OB会(ドイツ日本学術振興会研究者同窓会)は、結成以来8年の年月が経った。当該センターとの共催による日独学術シンポジウムを筆頭に、その多彩な活動は、これから同様のOB会を立ち上げようとしている国々の模範となっている。

とはいえ、ドイツのOB会の会員数は、近年停滞気味であり、また会員の年齢層が上昇する傾向にある。こうした状況を打開すべく、会費を支払った会員に対する「ベネフィット」をもたらし、OB会会員になることのメリットを周知し、OB会会員数を増加させることを目的とした新企画の必要性が痛感されてきた。ここで「ベネフィット」とは、日独両国に関連した学術情報(学界の最新動向、研究支援事業の紹介等)の提供を主に念頭に置いている。

その試みの第一弾として、OB会会長のメンクハウス教授がリーダーシップをとり、以下のプログラムに示したように、「会員による会員の招待」と称する講演会を、11月21日～22日の2日間にわたって、マールブルク大学日本研究所において開催した。

3人の講師による、延べ4つの講演（「日本研究所の組織と任務」、「日本の産業革命」、「日本における巡礼」、「日本の法律：ドイツ製か？」）と、マールブルク大学日本研究所ならびに市内の視察が行われた。

講演はいずれも興味深く、聴衆の反応も良かった。しかし問題は、参加者の数である。参加者はほぼ20人前後で、OB会員の2割に満たなかった。この点については、会員に対してアンケートを実施し、本企画の評価再検討を行ったが、企画の通知がショート・ノーティスであったこと、時期が他の学会総会と重なったこと、マールブルクという都市がアクセスにやや難があること、が不参加の主因と判断された。次年度以降の要検討事項である。

参考までに、以下に本行事のプログラムを掲げる。

Mitglieder laden Mitglieder ein

Adressen in Marburg:

Hotel: Europäischer Hof, Elisabethstr. 12

Empfang: Gewölbekeller, Deutschhausstr. 10

Vorträge: Hörsaalgebäude Biegenstr. 10, HS 207

Freitag 21.11.2003

Bis 14.00 Uhr Anreise

14.00 Uhr Begrüßung und Vortrag: Prof. Dr. Heinrich Menkhaus
(Geschäftsführender Direktor des Japan-Zentrums)
Struktur und Aufgaben des Japan-Zentrums

15.00 Uhr Vortrag: Prof. Dr. Erich Pauer
Japans Industrielle Revolution

16.00 Uhr *Kaffeepause*

16.30 Uhr Vortrag: Prof Dr. Michael Pye
Pilgerfahrten in Japan

17.30 Uhr Zu Fuß zum Gewölbekeller. Es besteht Gelegenheit zum Hotel zu gehen.

18.00 Uhr *Empfang im Gewölbekeller*

Samstag 22.11.2003

- 9.00 Uhr **Führung durch das Japan-Zentrum**
- 10.00 Uhr Vortrag: Prof. Dr. Heinrich Menkhaus
Japanisches Recht - Made in Germany?
- 11.00 Uhr **Stadtführung** (inklusive Universitätsgebäuden)
- 13.00 Uhr *Gemeinsames Mittagessen* - Restaurant noch nicht festgelegt

◎プロモーション(広報)活動

上述の「会員による会員の招待」との相乗効果をいくぶん期待して、11月21日の16時より、マールブルク大学のセミナー室において、本会国際交流諸事業の広報活動を行った。

同大学副学長のDr. Herbert Claasが歓迎の辞を述べられた後、萩尾が二国間交流事業と外特事業の紹介を約25分間行い、質疑応答に入った。参加者は30名前後で、ポストドク前後の若い世代が3分の2を占めた。とくに外特・欧米短期事業への質問が集中し、専門分野や受入機関ごとの採用配分枠の有無や、申請者の国籍について、萩尾が回答した。また、本会外特事業において、日本で研究するドイツ人研究者の数が停滞傾向にある原因と打開策について、聴衆との間でお互いの見解を交換した。

なお、この広報活動の様子は、地元の日刊紙に記事(以下参照)が掲載されたが、見出しが「ドイツから日本へ向かう研究者、いっそう減少」となっており、萩尾の説明を誇張形容した表現となっている。

Japaner werben in Marburg für Wissenschaftsaustausch

Immer weniger Wissenschaftler aus Deutschland forschen in Japan

Marburg (dag).Im Zeitalter der Globalisierung macht auch die Wissenschaft nicht an den Grenzen halt - Kooperationen, der gegenseitige Austausch von Informationen per Internet oder internationale Arbeitsgruppen in Labors sind an der Tagesordnung. Die "Japanische Gesellschaft für Wissen-schaftsförderung" (JSPS - Japan Society for the Promotion of Science) hat es sich zur Aufgabe ge-macht, Japans Position im internationalen

Wissenschaftsbetrieb zu stärken und fördert in bilateralen Programmen die Zusammenarbeit vor allem jüngerer Forscher. Wobei der Begriff "Wissenschaft" in seiner weiten Bedeutung verstanden wird und neben den Naturwissenschaften auch die Geisteswissenschaften umfasst.

In Deutschland arbeitet die JSPS mit dem Deutschen Akademischen Austauschdienst (DAAD), der Alexander-von-Humboldt-Stiftung (AvH) und der Deutschen Forschungsgemeinschaft (DFG) zusammen. Ein am Austausch interessierter Wissenschaftler kann entweder einen Kollegen in Japan bitten, ihn für eine Zusammenarbeit vorzuschlagen oder er reicht selbst ein Forschungsvorhaben bei den deutschen Partnerorganisationen ein. Seit diesem Jahr ist es auch Doktoranden möglich, einen Teil ihrer Forschungszeit (bis zu elf Monate) in Japan zu verbringen. Nach einer Vorauswahl entscheidet dann ein vierzigköpfiger Ausschuss über die Förderungswürdigkeit des vorgeschlagenen Projekts.

Um das Japanbild deutscher Forscher zu verbessern und gleichzeitig auch auf die vielfältigen Möglichkeiten, vom einwöchigen Seminar bis zum zweijährigen Forschungsaufenthalt, aufmerksam zu machen, sind Sho Hagio, Geschäftsführer des JSPS-Büros in Bonn, und Sabine Ganter-Richter, Diplomübersetzerin, momentan in vielen Universitäten zu Gast und werben für die JSPS-Programme. Hagio bedauerte sehr, dass, obwohl die Anzahl der Wissenschaftler, die nach Japan kommen, kontinuierlich steigt (seit 1998 um knapp 50 Prozent), der Anteil der deutschen Wissenschaftler im gleichen Zeitraum um gut 30 Prozent zurückging.

Er nannte verschiedene Gründe, etwa den Ruf Japans als Hochpreisland oder die Scheu vor der scheinbar unerlernbaren japanischen Sprache, um sie jedoch gleich wieder zu entkräften. So würden die Wissenschaftler mit großzügigen monatlichen Zahlungen unterstützt (etwa 3000 Euro monatlich), wozu noch Flugkosten, Reiseausgaben und andere Unterstützungen kämen, und in japanischen Labors sei selbstverständlich auch wissenschaftlicher Austausch auf Englisch möglich, findet unter www.jspc-club.de viel mehr mit jährlich rund 100 Millionen Euro. (Foto:Gerber) Weitere Informationen sind über die Internetseite www.jspc-bonn.de zu erhalten. Wer an Tipps oder Erfahrungsberichten ehemaliger Stipendiaten interessiert ist Material.

Hagio Sho vom JSPS-Büro in Bonn warb für mehr wissenschaftlichen Austausch zwischen Deutschland und Japan. Die japanische Regierung unterstützt den internationalen Austausch

5. センターのその他の活動

- 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- 情報提供ホームページ” forschen-in-japan.de” の更新作業
- ドイツ語版ニューズレター (ルンド・シュライベン) 等の作成・配布
- 各種情報収集提供業務
- 日本学術振興会事業の広報 (資料出展ほか)

6. センターの今後の活動予定

- ・ 3月26日(金) フンボルト財団、フェオドア・リューネン・プログラム
同窓生・新規採用者への情報提供会出席
- ・ 3月29日(月) 我妻研修員、帰国。
- ・ 3月30日(火) フンボルト財団との協議。
- ・ 4月1日(木) 神林研修員、来独。
- ・ 5月14日(金) 第9回日独学術シンポジウム開催(～15日)(於ハレ)
- ・ 6月5日(土) 日独学術交流講演会(仮称)開催(於デュッセルドルフ)

以上